紛争と天然資源～コンゴ民主共和国のコルタンを例に～

外国語学部フランス語学科 4 年　山田和歌子

「哲学とは、実践するものだ。携帯電話を使う度に、部品に使われているレアメタルは、アフリカの鉱山で働いている人たちから搾取したものかもしれない、と考えるのが哲学なんだよ。」と言ったある教授の言葉が私は気になっていた。そこで映画ブラッド･ダイヤモンドを見たのを機に、アフリカにおける天然資源と紛争の関係、そしてそれに先進国の政府と企業がどうかかわってくるのかを調べた。さらに、その関係の中に私たちも含まれていることを示せれば、当事者として何をすべきかが見えてくるのではないか、と思った。

そこでコンゴ民主共和国（旧ザイール）を取り上げた。この国は特に鉱物資源が豊富で、ダイヤモンド、金、銅、コバルト、亜鉛、スズ、石炭、原油に加え、コルタン原鉱など希少金属も産出される。“コルタンはコロンバイトとタンタライト（Columbo-Tantalite）という希少金属の略語で、精製されるとタンタル（Tantalum）金属となり、耐熱性を有する電解コンデンサとして、携帯電話、ビデオカメラ、ノートブック・パソコン、家庭用ゲーム機等、電子機器分野で汎用され”、“近年の IT 産業に欠かせない鉱物である。”世界のタンタル鉱石埋蔵量の約 6 割がコンゴにあるとされ、タンタル鉱石の価格は年率 10%で増加していたが、2000 年には 7 倍に急騰する。背景にあるのは第 3 世代携帯の登場とプレーステーション 2 の発売、[1]とまさに私たち日本人が日常的使用しているものだ。私たちが形態を使って便利な通信生活を享受し、ゲーム機で楽しみを満喫しているときに、コンゴでは、「黒い黄金（タンタル）」を得るために、12～18 歳の少年やルワンダの囚人たちが鉱山労働に駆り出されていた。

調べていくうちに、長期にわたる残虐なモブツ政権は東西冷戦科のアメリカの資金を含む援助の下で継続してきたこと、国家が鉱物資源の生産・流通を統制できる仕組みが無いのは植民地時代に遠因があるようだということがわかってきた。

論文では、現在のコンゴの状況を歴史的経緯から理解するために、第１章で植民地時代からモブツ政権、ルワンダ虐殺に始まる 1980 年代の内戦から現在のジョゼフ・デジレ・カビラ政権成立までの歴史を辿るとともに、鉱物資源の利益を巡る外国の内戦への介入の様子をルワンダとウガンダを例に見る。第 2 章では、タンタルの流通経路と多国籍企業の役割、そして日本との関わりを見る。第 3 章では、紛争コルタン問題の解決案を提示している。

【主要参考文献】

・ 吉田敦「鉱物資源問題と世界経済―コンゴ民主共和国の「紛争ダイヤモンド」問題を例証として―」、『商学研究論集』№22、明治大学、2004。

※論文 p。p。150 で、タンタルの精製･流通を独占するビッグ･スリーの 1 社、中国国有企業の名称として挙げている Xinxia は誤り。正しくは、Ninxia。

---

[1] 吉田敦　前掲論文，pp.148-149.
吉田栄一「ウガンダ軍のコンゴ内戦派兵とその資源収奪について：紛争地資源の作るコモディティ・チェーン」,『アフリカレポート』,№36，2003，p.14．によれば，2000 年の一年間で価格が 11 倍になったと言う.